

長谷川信子(2008)「節のタイプと呼応現象：CPシステムと空主語の認可」『「文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言(1)」平成19年～21年度科学研究費補助金(基盤研究(B)研究報告書)』(研究代表者：長谷川信子) pp. 5-36. 神田外語大学.

節のタイプと呼応現象：CPシステムと空主語の認可*

長谷川 信子 (神田外語大学)

要旨

一致現象の典型は英語などの言語に見られる「主語と述語の一致」であるが、それは日本語では観察できない。特定の語用機能(例えば命令文)の観点から考察すると、日本語にも「特定人称主語と述語・文末形態」の間に一致現象が豊富に観察できることは、日本語学の分野でも指摘されている(例えば、仁田(1991))。本論文では、それらをCP要素と主語との一致として分析できることを論じ、その上で、命令文などで観察される空主語(主語の省略、無声化)は、CP要素と一致した場合に可能になるとの「空主語認可の条件」を提示し、それが、日本語に限らず英語の日記文などで観察される主文の1人称主語省略現象などを説明できることを示す。さらに、この条件が、CPの機能と構造の観点から、PROやproといった主語の空範疇を、CPによる認可として、統一的に分析できることを論じる。

キーワード： CPシステム、命令文、空主語、PRO、pro、文の語用的機能

1. はじめに

日本語と英語などの印欧語とは、その最も顕著な統語的相違点として、語順を別にすると、(7)主語と述語の「一致」、(i)疑問詞疑問文などに見られるWh-句の移動が指摘できる。日本

* 本論文の内容の一部は、神田外語大学大学院でのセミナー、CLS言語学ワークショップ『語用機能と統語論』(2007年9月3日)、『理論言語学ワークショップ』(2007年10月20日)、『日本語学と理論言語学：文の語用的機能を視野に入れて』(2008年1月26日)、神田外語大学20周年記念大学院『言語学国際シンポジウム』(2007年10月21日)、で発表し、それらを総合してまとめたものであり、その一部は、長谷川(2008)、Hasegawa(2008)にも掲載した。これらの発表や論文執筆の際には多くの方々から有益なコメント等をいただいた。特に、上記『理論言語学ワークショップ』にも研究発表し、次の日(2007年10月21日)の神田外語大学開学20周年記念国際シンポジウム『Syntactic Structure and Functional Categories』(於：東京国際フォーラム)でコメントをして下さった宮川繁氏(そのコメントは本報告書に収録)、10月20・21日の上記ワークショップと国際シンポジウムで発表して下さい下さったLiliane Haegeman氏(発表論文とハンドアウト原稿(翻訳)は本報告書に収録)には感謝したい。上記の発表や論文と関わる研究の一部は、平成19-21年度科学研究費補助金(基盤研究(B)、課題番号19320063)『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』(研究代表者：長谷川信子)による。

語には、(ア)も(イ)も明確には観察できないのである。そして、統語理論が、英語など印欧語の現象を基盤に構築・発展され、その構造構築の基本に「主語の位置」「述語との関係性」を置き、構造変化の代表的操作として、「主語的要素の移動 (NP 移動)」「疑問詞の文頭への移動 (Wh-移動)」を想定してきたことから、(ア)(イ)の現象が欠落している日本語は、これまでも多くの理論研究がなされてきたにもかかわらず、理論構築において、その中心的な役割を担うには至っていない。実際、日本語については、言語構造、文構造の基本と思われる「主語の位置」についても(生成)文法学者の間でも共通の認識には至っていないし、構造変化を担う「移動操作」についても、語順変換をもたらす「かき混ぜ操作」は想定されてはいるが、その移動の性質 (NP 移動か Wh 移動か、移動先はどこか、なぜ移動するか、など) については未だ共通理解が得られているとは言い難い。

上記の(ア)「主語の位置と述語との一致」、(イ)「Wh 句の文頭への移動」は、表層的な現象としては別の現象に見えるが、(GB 理論以降の)理論の観点からは、移動には移動を駆動する主要部とその主要部と関わる移動する要素(移動先)との間の「一致」なり「呼応」なりが条件としてある、と考えられている。つまり、主語は、述語の一致素性が表出される時制辞 (Infl) の指定部に「一致」を求めて移動し、Wh 句は、疑問文の作用域を決定する補文標示主要部 (C) との「一致」のためにその CP 指定部へ移動し作用域を明示するのである。こう考えれば、特定位置での主語の生起、およびその述語との一致も、Wh 句の文頭への移動も、いずれも、その主要部 (Infl, C) との「一致」の要請が、それと一致する要素 (主語、Wh 句) をそれぞれの指定部 (IP 指定部、CP 指定部) へと移動させる操作とみなせるのである。

こうした理論の観点からは、上記(ア)「主語と述語の一致」と(イ)「Wh 句の文頭への移動」が欠落している日本語の特徴は、日本語には一貫して「一致」が欠如しており、それ故移動も駆動されない、ことによると説明することが可能である。そして、実際、たとえば Fukui (1986)、Kuroda (1988)は、日本語を、英語やロマンス語などの「一致言語(Agreement Language)」に対し、「非一致言語(Non-Agreement Language)」と分類している。

しかし、「一致言語」であっても、「指定部」と「主要部」が常に明示的に一致を示しているわけではない。主語と述語の一致においては、確かに時制節では、明示されているが、(英語の)不定詞節では、そうした一致は見られない。また、Wh句移動についてもCの主要部がWh句と呼応して義務的に特別な表示を示すとも言えない。¹ また、文頭への移動については、

¹ 主文に見られる疑問詞疑問文では、Wh 句の移動と同時に助動詞も C へ移動してくることから、Wh 句と C の一致があるとも言えるが、補文内での Wh 句の移動 (間接疑問文) では、助動詞の C への移動は (標準的) 英語では見られない。また、逆に、助動詞の C への移動は、疑問詞疑問文に限ったことではなく、(i)に見られるような否定辞の前置、条件節での倒置などでも起こることから、Wh 句が助動詞と CP レベルで常に「一致」を明示するとは言えない。

- (i) a. Only very rarely will students enjoy that subject.
- b. Had I not been there, I wouldn't have done that.

疑問文のWh句がその代表と捉えられるが、同様のWh移動（A'移動、もしくはOperator移動）が関わるとされる主題化（Topicalization）や、関係節化などでは、主要部（C）との明示的一致は見られない。むしろ、時制節の主語と述語の一致を除けば、特定の主要部とその指定部が「同時に」「一致」として明示される現象の方が少ないのである。それでも、英語のような言語では、主語位置が述語（主要部）との関係で把握しやすく、さらに、主語位置との関係から、主語を越えての移動が、CP指定部への句の移動であれ、C主要部への助動詞の移動であれ、容易に見て取れることから、「移動」が言語操作の基本としてあり、それが文の意味や機能と関わると想定されてきた。

こうした英語的な言語の状況に比べ、日本語のような主要部後置言語では、文頭への句の移動にしても文末への主要部の移動にしても、「かき混ぜ」操作など、語順変換に寛容なこともあり「主要部」と「指定部」が「一致」を示して移動を駆動しているという現象は表面的には把握しにくい。そして、決定的に、「一致」の代表格と想定されてきた印欧語で顕著に観察される「主語と述語の一致」が（尊敬語などの現象を除けば）観察されないのである。²しかし、上述したように、「一致」は必ずしも、指定部と主要部のペアで起こるわけではない。Wh移動などのように指定部だけで明示的に起こることが多いのであるなら、逆に、主要部だけで起こることも許される筈であろう。

以下では、日本語にも、「一致現象」として捉えるべき現象が数多く存在することを指摘する。それらは、多くの場合「主要部での明示」に留まっているように見え、英語のような言語での「文頭への移動」のような「明らかな構造的変化」を示さないことから、これまでの統語論研究では見過ごされてきた。しかし、逆説的だが、理論の整備により、上述のように「指定部が主要部と一致する」ことが明らかとなり、指定部で明示される現象も主要部で明示される現象も同じ統語的操作・素性の具現として捉える可能性が与えられ、これまで見過ごされてきた現象が「日の目を見る」ことが可能となってきたのである。以下では、このような問題意識から、日本語の「文末」に焦点をあて、特定の文末（主要部）要素が特定の文中要素（指定部）と呼応する現象を、英語などで文頭要素（指定部）から（主要部による）文中での操作と構造を捉えてきたのとは逆の方向により、文の構造と操作の観点から考察し、それらが、統語的「一致現象」として捉えられることを示す。

第2節では、先ず、理論的整備の上でも、Rizzi(1997)や Cinque(1999)などにより、文構造（特に CP 構造）が従来の理論的中心課題であった命題（IP）の構造だけでなく、発話機能にも対応できるものとして整備されつつあることを、英語の現象にも言及して観察する。そして、その CP 構造が、理論言語学とは一線を画して日本語の体系を追求してきた、国語学、日本語の分野で広く受け入れられている文の階層構造の考え方（cf. 南(1974)、田窪(1987)）と共通する部分の多いことを指摘し、理論言語学の貴重な知見である「主要部と指定部の関

² Hasegawa (2005a)では、日本語の主語尊敬（尊敬語）と目的語尊敬（謙讓語）を一致操作として捉えた分析を提示した。

係性」の観点から、日本語と英語が、主要部と指定部の依存の仕方に大きな異なりのあることを観察する。第3節では、第2節で指摘した日本語と英語の違いを基盤に、主要部に明示される日本語の現象を扱い、それらを、指定部との「一致現象」として分析することで、日本語の特性だけでなく、同様の現象がどのように英語のような言語と関わるかを見ていく。扱う現象は、疑問文、命令文、意志・勧誘（マシヨウ）文、1人称省略構文、PRO主語解釈などである。第4節では、日本語と英語のような言語との相違を文と関わる機能範疇（CPとIP）の役割の観点から概観し、今後の課題を提示する。

2. モダリティの構造：CPシステム

文は、客観的に事態を記述するだけでなく、記述される事態に対する表現者（話し手）の評価や態度、その語用的機能を表すことができる。前者は、いわゆる「命題」に対応し、後者は「モダリティ」と呼ばれる。こうした文が表現する「命題」と「モダリティ」は、その内容や機能と同時に、統語的な現象と密接に関わっており、特に、文の階層的な構造と対応すると考えられている。2.1節では、Rizzi (1997)などによる最近の統語理論で想定されつつある文構造（時に、階層化されたCPシステム）を提示し、2.2節では、日本語学で提案されてきた文の階層構造に言及する。これらは、各々の文やで独立して考察されてきたが、理論的視点を用いて抽象化するなら、非常に酷似していることを指摘し、第3節以降の討議につなげたい。

2.1 Rizzi (1997)のCPシステム

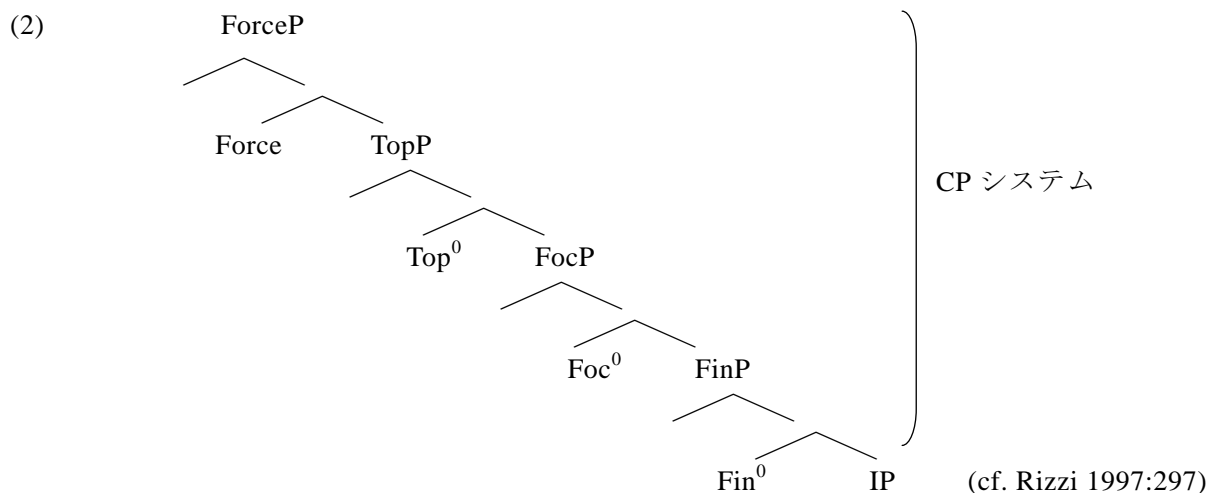
生成文法で想定する文構造の観点からは、「命題」はIPレベル（IPとそれに含まれるvP-VP）として、「モダリティ」はCPレベルとして、構造化できる。Rizzi (1997)は、主に英語やイタリア語の現象の考察から、言語に共通のCP構造を(1)のように位置づけ、(2)のような構造を提示している。³

- (1) a. We can think of the complementizer system as the interface between a propositional content (expressed by the IP) and the superordinate structure (a higher clause or, possibly, the articulation of discourse, if we consider a root clause). As such, we expect the C system to express at least two kinds of information, one facing the outside and the other facing the inside.

³ Rizzi (1997:297)は、イタリア語の主題化要素と焦点化要素（疑問詞）の構造の考察から、FocP (Focus Phrase) と FinP (Finite Phrase) の間にもう1つ TopP (Topic Phrase) を想定した構造を提示しているが、本論文では、TopPは元々随意的な範疇ということもあり、FocPの上部に1つのみ位置するとすることで十分と考える。以下でも述べるが、(2)を含め、命題上位のCPレベルの構造そのものの検証が、本論文（および本研究プロジェクト）を含めた統語理論研究の課題である。

(Rizzi 1997: 283)

- b. I will then assume that the C system expresses a specification of finiteness, which in turn selects an IP system with the familiar characteristics of finiteness: mood distinctions, subject agreement licensing nominative case, overt tense distinctions ... (Rizzi 1997: 284)



つまり、CPシステムは命題レベル (IP) と上位のレベル (従属節なら主文；主文なら談話や情報構造) とを繋ぐインターフェイスとしての機能範疇と位置づけられている。これらの、CP内に投射される「主要部」のうち、文の時間軸との関係を表すFiniteと文のタイプ (主文なら、疑問文、断定文、感嘆文、命令文などの発話行為と関わる文タイプ；従属節なら、補文、関係節、間接疑問文などの主文との関係を表す文タイプ) を示すForceは、不可欠要素だが、TopicやFocusは文が主題や焦点を含む場合にのみ投射される随機的要素である。⁴

この(1)に示した構造は、英語やイタリア語などの主要部前置型言語の以下のような現象の記述・説明を直接的な経験的基盤としている。以下は、Radford (2004: 327-336)から引用した例である。

- (3) a. He would turn to no other colleague.

- b. No other colleague would he turn to.

(否定辞倒置)

⁴ CPレベル内のFiniteP (FinP) の役割は、そこで述べたように文全体の時制が上位レベル (主文なら発話、従属節なら主文) とどのように関わるかを示すことにあると思われ、それは、文の時制表示としては、英語などでは命題レベルのIP (もしくはTP) の素性と関わる (指定、もしくは、一致の要請の) 形で具現されよう。Finは、疑問文などでInflがCP主要部へ上昇する際にも関わっているであろうが、Rizzi (1997)の主張するように、(以下では、それを踏襲するが) 疑問詞疑問文の疑問詞要素の生起位置がForceの指定部であるなら、InflのCP内での移動位置は最終的にはForce主要部である可能性もあろう。CPレベルを(2)のように階層化することで得られる利点 (説明が可能になる現象) については、以下でも触れるが、複層化することで解決すべき問題も同時に出てくるわけで、今後の研究が待たれる分野である。Rizzi (1997)、Cinque (1999)、Endo (2007)なども参照。

- (4) a. We cannot tolerate that kind of behavior in a civilized society.
 b. That kind of behavior, we cannot tolerate in a civilized society. (主題化)
- (5) a. I am absolutely convinced [that no other colleague would he turn to].
 b. Syntax is the kind of subject [which only very rarely will students enjoy].
 c. A university is the kind of place [in which, that kind of behavior, we cannot tolerate].
 d. He prayed [that atrocities like those, never again would he witness.]
- (6) a. What will you never again do?
 b. *What never again will you do?
 c. *What will never again you do?
 d. That kind of behavior, can we tolerate in a civilized country?
 e. *Can that kind of behavior we tolerate in a civilized country?

(3)には否定辞倒置現象 (Negative Inversion) が、(4)には主題化 (Topicalization) が示されている。否定辞倒置では否定辞が文頭 (CP内の指定部) に移動するだけでなく、助動詞も主語の前に現れることから、CP投射内の主要部の位置も移動に関わっていることが分かる。主題化は主題となる要素がCP投射内の指定部へ移動する。これらの操作はしばしば主文に特有の根変形 (Root Transformations) と扱われているが (cf. Emonds (1976)) (多少容認度には個人差があるようだが) (5)に見られるように従属節でも可能である。そして、興味深いのは、(5d)に見られる従属節内で起こる時の従属節標識 (補文標示のthatや関係代名詞のwh要素)、否定辞倒置による否定辞要素と助動詞、主題化要素の順番である。これらは、補文標識のthat、主題化要素、否定辞要素、助動詞、という順番となっている。従属節全体の機能 (Force) を表示する要素として補文標示 (主要部) や関係代名詞 (指定部要素) がForcePにあると考えると、主題化要素はその下のTopic指定部へ、そして否定辞要素は否定辞倒置現象には強調機能が伴うことからFocus (焦点) の指定部へ、助動詞はその焦点化と連動することからFocus主要部へ移動していると分析できる。つまり、(5d)のような例文は、(2)のCP構造のForceP、TopP、FocPを使用した構造を持つと想定すれば、説明できるのである。さらに、主文が疑問文の場合の(6)であるが、疑問詞疑問文はwh句の前置と同時に助動詞の移動も伴うが、否定辞倒置とは共起しないし、また、Yes-No疑問文での助動詞の倒置は主題化要素の後にしか生起できない。いくつかの可能性が考えられるが、(6)の現象は、文のForceが疑問文だとしても、ForcePの主要部や指定部にwh句や助動詞が移動しているとは考えにくい。ForcePにまで移動しているなら、(5)のように、否定辞倒置や主題化はForceP要素と共起できる筈だからである。疑問文が否定辞倒置と共起できないことは、共にFocPへの移動を要求すると考えれば説明がつくし、疑問文の助動詞はTopP以下 (FocPもしくはFinP) の主要部へ移動するとすれば主題化要素との位置関係も解決できる。

(2)で提示したようなCP構造がどのような言語現象と関わるか、また、(3)~(6)のような現

上記の(8)(9)で提示された日本語の文の階層を想定することで、(11)や(12)の現象が容易に説明がつく。

- (11) a. 花子は [テレビを {見/*見た/*見ない/*見てい} ながら] 食事した。(A類)
b. [雨は降った] {けど/*のに}、気温が下がらない。(C類 vs.*B類)
- (12) a. [本を注意深く読む] ことは大切だ。
b. [花子 {が/*は} さっきまで図書館にいたこと] に誰も気づかなかった。
- (13) a. 太郎は、たぶん {来るだろう/*来てはいけない/*来なさい}。
b. どうか、テストをやさしく {して下さい/*する/*するだろう}。
c. 一体、{花子は何をしたのですか/*早く来て下さい/*太郎は車を買った}。

従属節は(11)で見られるように、内包できる文タイプにより容認度が異なり、付帯状況のナガラ節は文末には述語の語幹のみが許され、時制やアスペクトは含むことができない、つまりA類(一般事態)の節であり、逆接を表すケドとノニは、ハ格要素を含むか否かで異なる。また、補文となるコト節(12)は、主格を伴うB類までは含めることができるが、主題のハ格を伴うC類以上は含むことができない。(13)では、副詞のタイプにより文末のモダリティに制限があることを示している。こうした副詞を含め文中の要素と文末のタイプが連動するという現象は、現代語の「係り結び」とも考えられ、野田(1995)や佐野(2006, 2007)などで考察されている(14)に見られる「例示のデモ」の現象など、幅広く観察されると思われる。

- (14) a. のどが乾いたからお茶でも {飲もう/飲みたい/*飲んだ}。
b. さっき、子どもでも来てた {ようだ/のだろう/に違いない/*φ}。
c. 太郎は [酒でも飲んだ {*φ/ようだ}] から、やけに機嫌がいい。
d. 太郎は [酒でも飲んで] から、風呂に入った {のだろう/ようだ/*φ}
e. 太郎は [酒でも飲んだ] から、機嫌がいい {のだろう/ようだ/*φ}
f. 花子は [太郎が酒でも飲んだ {*φ/らしい}] と思っている (ようだ)。
g. 花子は [太郎が酒でも飲んだ {*φ/*らしい}] ことを忘れてる (ようだ)。

例示のデモには、(14a)(14b)から分かるように、「ようだ」のような不確定のモダリティが必要で、モダリティを持たない断定文では許されない。しかし、デモは、詳しくは、野田、佐野に譲るが、それが生起する従属節のタイプにより、その節を越えて主文のモダリティと呼応することができるか否かが異なる。カラ節では越えられるが、ト節やコト節では越えられない。また、コト節が不確定のモダリティそのものを許さないことから、結果として主文に不確定モダリティがあってもデモ句は補文内では生起できない。こうした現代版「係り結び」とも言える現象は、モダリティの生起に関わる節の分類だけでなく、デモ句の認可に関わる

モダリティとの構造的関係性を規定する必要がある、その関係性をモダリティとの「一致」と捉えるなら、言語の一般に見られる「一致操作」の観点から考えることができる。つまり、モダリティを主要部として、デモ句はそれとの一致を必要とし、その一致操作には、越えることのできる文の境界に違いがあり、カラ節の境界は越えられるがト節やコト節の境界は越えられない。そして、そうした節境界は、言語一般に想定された文タイプと対応していると思われるわけで、そうした観点から、(8)(9)などで提示された分類や階層が、2.1 節で提示された(2)のような構造とどの程度対応するかが検証できれば、日本語学での知見・一般化と言語学で提示する構造体系が相互に発展を促すことになると思われる。ちなみに、佐野(2006, 2007)はこの観点からこうした現象を分析している。

2.3 一致現象：主要部と指定部

上記で、文が、命題レベルとモダリティレベルを取り込み、階層構造を成しているであろうことは、日本語の現象からも英語などの印欧語現象からも想定されることを見た。ただ、そのタイプ分けや階層に、日本語の場合は、文末に許される述語のタイプやモダリティを、印欧語の場合は文頭に現れる要素の位置関係を基本としている点が異なる。しかし、印欧語の場合の文頭も、日本語における文末も、文の特徴付けを担う範疇の観点からは、その指定部（文頭）と主要部（文末）として同じ範疇から派生する2つの要素と考えられる。つまり、日本語の場合、文範疇（例えば、(8)のB類）に、主語（主格要素）と時制を伴う述語が生起するなら、それは、英語でIPの指定部に主語がその主要部Inflに時制が生起するのと同様に考えられよう。その観点からは、B類以上のC類やD類のタイプは、IP以上の構造としてCPシステムに翻訳が可能となる可能性が高い。そして、実際、上田(2007)では、そのような試みがなされている。以下の第3節では、命題レベル（(1)の観点からはIPレベル、(8)(9)の観点からはA類・B類、もしくは一般事態・個別事態レベル）を越えたモダリティレベルの現象を日本語を中心に考察し、それを(1)のCP構造に言及する形で分析する。

3. Force（語用機能）と関わる現象：疑問文、命令文、1人称主語文

日本語には、(11)～(14)で見たように（また、以下の(19)(20)で観察するように）、多種多様なモダリティ表現が存在する。それらの全てを記述・分析することはできないが、それらのうち、「典型」と思われるいくつかを扱うことで、日本語の（ひいては言語の）CPレベルで見られる現象を考察し、それらから「CPでの一致現象」の本質へ迫りたい。まず、一致現象の代表格として疑問詞疑問文から出発し、第1節でも簡単に触れたが、CPレベルでの一致現象では、主要部か指定部のどちらかにその「疑問詞疑問文」としての機能が明示されることを見る。このCPレベルでの一致現象の一般化を基盤に、日本語と英語の命令文を取り上げ、

命令文でも、それが踏襲され、命令文の主語のタイプ（2人称）と述語の形態が一致しており、結果として主語の省略が可能となっていると論じる。特定人称主語が述語（モダリティ）の形態と連動するという現象は、仁田(1991)や上田(2007)で「人称制限」として観察・記述されている。ここでは、それを発展させ、述語が特定人称主語と「一致」を示すなら、主語の省略（ゼロ代名詞化）が可能となると一般化する。更に、明確に人称一致を示す述語形態が観察されていなくても、主語の省略が確認されるなら、「一致」が起こっているとの仮説を提示し、第4節では、その仮説を、1人称主語の省略現象を日本語と英語から分析し、さらに、主語省略の典型である PRO 主語も CP レベルでの一致過程を経て可能となるとの提案を行う。第5節はまとめである。

3.1 疑問詞疑問文

疑問詞疑問文の構築に際し、英語は、第1節でも述べたが、疑問詞（wh 句）を文頭（CP 内の指定部）に移動させる。助動詞も主語の前に移動するが、この操作は必ずしも疑問文に限ったことではなく、(3)の否定辞倒置などでも観察される。他方、日本語は、疑問詞を文頭に移動する必要はないが、文末（CP 主要部）に終助詞「か」を用いて疑問文を表示する（cf. Cheng (1991)）。

- (15) a. What will John buy?
 b. I want to know [what John will buy].
 c. 太郎は何を買いますか?
 d. 私は [太郎が何をかうか] 知りたい。

つまり、Cheng (1991)は、同じ「疑問詞疑問文」という文タイプ・機能であっても、それをどのように表示するかによって、言語間に違いが見られるとする。こうした疑問文というような文タイプ・機能の統語的表示について、Rizzi (1997)は、上記(2)の文構造の観点からは(16)のように述べ、Force と関わる事柄と捉え、それは、形態・音韻的には、指定部か主要部に（稀には、両方に）現れると一般化している。

- (16) Force is expressed sometimes by overt morphological encoding on the head (special C morphology of declaratives, questions, relatives, etc.), sometimes by simply providing the structure to host an operator of the required kind, sometimes by both means (this is rare case, presumably due to an economy of representation type principle favoring overt expression of a certain substantive specification on the head or on the specifier, but not simultaneously on both: ...).
 (Rizzi 1997:283)

Hasegawa (2005b)では、この一般化は、疑問詞疑問文だけでなく、否定対極表現や取り立て詞のモ格要素の生起にも関連していることを示し、(17)のような原則として提示した。

(17) 語用機能 (Force) の統語的表示

語用機能 (Force) は、音韻形態的に、CP システムの「主要部」もしくは「指定部」で表示されなければならない。(cf. Hasegawa 2005b: 39)

筆者は、Hasegawa (2005b)、長谷川(2006, 2007a, 2007b, 2008)、で、この原則は言語間にパラメーター化しているのではなく、文の Force 機能の表示という語用的機能・解釈と関わると考え、日本語のように(15c,d)のように主要部で疑問文機能を表示する言語においても、(18B-(ii))のような短縮疑問詞疑問文では、疑問詞が CP 指定部に生起し、その結果疑問の終助詞「カ」が不要となると論じた。

(18) A: 花子が何かを買ってきましたよ。

B: 本当? (i) 何を買ってきましたか。 * \downarrow \uparrow (ii) 何を(*か)? \downarrow \uparrow

(Hasegawa (2005b)、長谷川(2006, 2007a))

短縮疑問文は前出の文と重複する IP 部分を省略する Sluicing 構文であるが、その際、疑問詞疑問文として最低限必要な疑問詞は省略される IP 内に留まることができず CP 指定部に移動する。そして、CP 指定部に疑問詞が移動することにより(17)が満たされることから、短縮無し B-(i)では CP 主要部に不可欠な疑問の終助詞「カ」が短縮疑問文では不要になるのである。

すなわち、疑問詞疑問文は日本語でも英語でも CP における主要部と指定部と関わる「一致」現象なのだが、(17)のような原則から、音韻形態的には、そのどちらかでの表示として具現すると考えられるのである。⁷

3.2 命令文：日本語と英語から

日本語には、語末のモダリティ表現と連動して人称制限が広く観察されることが、仁田(1991)、上田(2007)などで指摘されている。(19)(20)は上田(2007)からの引用であるが、(19)は認識モダリティ (判断のモダリティ) が、(20)は発話伝達のモダリティが、主語の人称を制限する、すなわち、主語とモダリティとの「呼応・一致」が見られる。

- | | | | |
|---------|------------------------------|--------|---------|
| (19) a. | きっと、{僕/*君/彼}は行く <u>だろう</u> 。 | (推量) | [-2 人称] |
| b. | {僕/*君/彼}は行く <u>まい</u> 。 | (否定推量) | [-2 人称] |
| c. | {僕/*君/彼}は行く <u>でしょう</u> 。 | (推量) | [-2 人称] |
| d. | {僕/*君/彼}は大学へ <u>進学した</u> 。 | (断定) | [-2 人称] |

⁷ 短縮疑問詞疑問文の分析に関しては、本報告書の Abe の論文も参照されたい。長谷川(2006, 2007a)とは異なった観点からの分析が提示されている。

- (20) a. { *僕 / 君 / *彼 } が早くこっちへ来い。 (命令) [+2 人称]
 b. { *僕 / 君 / *太郎 } はそんなこと気にするな。 (禁止) [+2 人称]
 c. { 僕 / 君 / 私たち / *彼 } も行きましょう。 (誘いかけ/勧誘) [+1/2 人称]
 d. { (僕) / *君 / 太郎 } なんか死んでしまえ。 (願望) [-2 人称]
 e. { 僕 / *君 / *彼 } は、決して行くまい。 (意志) [+1 人称]
 f. { 僕 / *君 / *彼 } がすぐに行こう。 (意志) [+1 人称]

(上田 2007: 270)

こうした人称一致現象のうち、本節では、2人称主語を取る(20a, b)の命令文((20b)の禁止文は否定命令文と考え、命令文の一つのタイプとして扱う)と1人称主語を取る(20c)の意志・勧誘文について考察・分析する⁸。

先ず命令文だが、(20a, b)や以下の(21)から分かるように、日本語では述語の活用(命令形)や「なさい」、禁止を表す命令否定辞の「な」によって、文末で明示される。

- (21) a. { ϕ / 花子が / お前が } 読め。 (ϕ は省略された主語を示す)
 b. { ϕ / 誰か / みんな (が) } こっちへ来なさい。

これらの文で、主語は明示しなくともよいが、その場合の解釈は2人称の「君、お前」などである。ただ、(21)に見られるように、形態的には3人称である「花子」「誰か」「みんな」なども主語となり得る。こうした3人称の主語を持つ命令文というのは、以下で扱うが英語などでも観察され日本語に限ったことではない。これらの「3人称命令文」では、「花子」「誰か」「みんな」といった主語は形態的に3人称だが、それに該当する指示された人は、命令文の「聞き手」「受け手」である必要があり、その意味では、「語用的には2人称」である。形態的な人称と区別するために、こうした語用的人称を、以下では [+Ad] (聞き手、addresseeからの略) や [+Sp] (話し手、speakerからの略) といった素性を用い、命令文の主語はこの [+Ad] 素性を持つ要素であるとする。すなわち、文末の命令形や命令否定辞の「な」は主

⁸ つまり、本節では、こうした例の中から(20a, b, c)のタイプを扱う。ただし、(20c)については、上田は2人称(のみ)も許すとしているが、1人称(単数、複数)主語しか許さないと思われる。(20c)の「君も行きましょう」は確かに容認されるが、それはモ格により「私も君も」と「話し手」の随伴者を示す「複数1人称」として解釈できる(もしくは、1人称の存在が前提となる意味構造をもつ)からであろう。(モ格の分析については、Hasegawa (1991, 1994, 2005b)を参照されたい。)ちなみに主語が2人称のみの「君が行きましょう」は非文であり、このことから2人称だけでは非文になると思われる。マシヨウ文は3.3で扱うが、そこでは、「ましょう」は1人称(話し手、Speakerを表す [+Sp] 素性を持つ要素)との「一致」として分析する。

1人称主語を取る(20e, f)も(20c)同様に分析できると考えるが、以下で提示する分析が、他のモダリティ((19)、(20d))にも適用できるか否かについては、今後の課題としたい。これらの文の構造、特にモダリティ構造全般については井上(2007)、上田(2007)を参照されたい。

語の語用的 2 人称 [+Ad] との一致を要求するのである。⁹

さらに、これらの(20a, b)(21)が命令文という機能を持つということは、Rizzi (1997)の(1)の文構造（および、(2)の考え方）を踏襲するなら、その最上位のForceが命令文（以下では、命令、imperativeからの略の[IMP]）として表示されていると考えられる。そして、命令文が持つ時制は、過去や現在といった実際の時間軸上には未だ特定できないことから、非現実の[irrealis]である。つまり、Rizzi (1997)の(2b)の仮説によれば、CPシステム内のForceのIMPはFin素性として[irrealis]を指定し、それが述語の形態を決定する。同時に、IMPは主語に[+Ad]素性を持つ語用的 2 人称要素との一致を必要とするのである。¹⁰

そして、実際、命令文が CP システム（おそらく Fin 主要部）を使っていることを示す現象が(20b)のような否定疑問文で観察できる。(20b)では、文末の形態が「述語の終止形」+「な」となっている。終止形は、通常、時制を示すことのできることから、IP レベルと関わると思われ、それに後続する「な」は Infl もしくはその上位の CP 内主要部であることが容易に想定できる。実際、語順からだけでなく、「な」が CP 内に存在することは、(22)(23)に見られるモ格の句と否定辞の関係からも明らかとなる。

- (22) a. 花子もその本を読んだ。
b. 花子がその本も読んだ。
c. 花子もその本を読まなかった。
d. 花子がその本も読まなかった。
- (23) a. 君もその本を読むな。
b. その本も読むな。

Hasegawa (1991, 1994)で論じたが、モ格句は、主語にも目的語にも付随するが、否定辞を含む平叙文では、常に否定辞より大きな作用域を取る。つまり、(22c)の場合、意味しているのは、「花子だけでなく、少なくとももう一人、その本を読まなかった」という Also>Not の読みことであり、「その本を読んだ人がいるが、それに加えて花子もその本を読んだ、というわ

⁹ 命令文には、語用的 2 人称が文の機能範疇（の素性）として語彙的 2 人称とは独立して扱う必要性のあることは、Portner and Zanuttini (2003)、Porter (2004)でも論じられている。彼らは、命令文の分析に、Addressee Phrase (AddP)を文の命題部分 (IP) 上部に想定しているが、ここでは、CP システムの Force に語用的 2 人称素性 [+Ad] を提示することで、Portner ら AddP で捉えようとした文の語用的機能と「聞き手主語」の関係を分析する。以下、(24)(26)を参照。

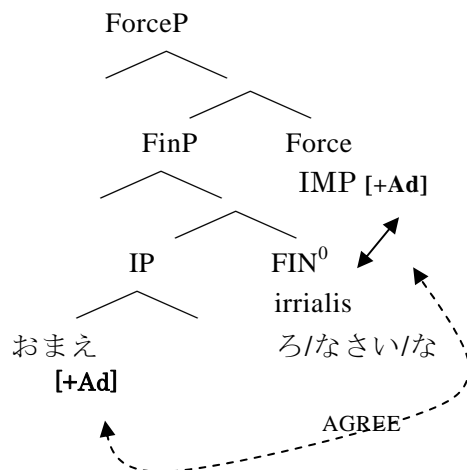
¹⁰ ちなみに、この命令文のメカニズムは、基本的には、3.1 節の疑問詞疑問文と同様である。疑問詞疑問文では、疑問文であることが CP (Force) で明示され、それが CP の主要部 (CP 内のどの主要部に該当するかを決定するには至っていないが) に疑問終助詞「か」を要求し、文内の疑問詞は「か」との一致により解釈（その作用域）が可能となるのである。

けでない」という Not > Also の読みはない。こうした事実(および、他の現象)から、Hasegawa (1991, 1994, 2005b)で筆者は、モ格句が解釈される位置は「ない」より上位にあり、「ない」が時制辞を後続させることから IP に存在すると考えれば、それは、IP 指定部かそれ以上であると論じた。

これを前提として(23)の否定命令文を見てみよう。(22)と同じくモ格句と否定辞「な」があるが、興味深いことに、(23)には、Not > Also の読み、つまり、(23b)なら、「他の本を読むことに加えてこの本も読む、ということ禁止する」という解釈が可能なのである。モ格句のスコープ解釈が IP 指定部(かそれ以上)で行われるなら、この Not > Also の読みを可能とするためには「な」は IP 指定部以上で解釈されなければならないことになる。つまり、CP 内(少なくとも Fin 以上)で認可される必要がある。

上記の討議を踏まえると、命令文の構造とメカニズムは、疑問詞疑問文(3.1 節)の場合と平行して考えられ、(24)のようにになっていると思われる。

(24)



命令文IMPはForceの一つのタイプであり、それは一致素性 [+Ad] を持ち、その素性を持つ文内の要素と一致を必要とする。さらに、IMPはFinの時制としてIrrealisを要求する。そして、命令文の主語が省略できるのは、日本語の場合は、以下でも述べるが、様々な名詞句が会話状況から復元可能なら省略できると広く考えられていることから(例えば、久野(1978))、命令文で主語が省略されることには命令文にのみ関わる特別な操作が適用されていると考える必要はないように思われるかもしれないが、上述したように、命令文の主語は「復元可能なら誰でもいい」わけではなく、「聞き手」として [+Ad] 素性を持つ要素である。この [+Ad] 素性を人称、数、性を指定する ϕ 素性に準じる「人称素性」と考えるなら、命令文の主語省略は、CP (Force) 内の人称素性 [+Ad] と一致していることによると考えられる。つまり、この主語省略プロセスは、基本的には、ロマンス語などの主語脱落言語 (Null Subject Language; NSL) の pro 主語と同様に、機能範疇 (IP や CP) の人称素性との「一致」を必要条

件とする「主語脱落」過程の一つであるとみなすことができる。¹¹

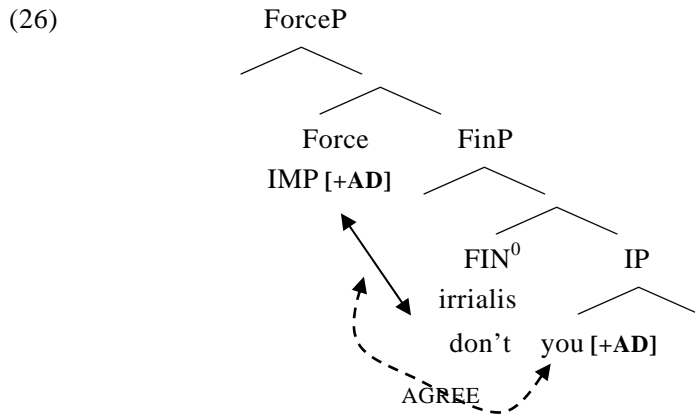
ここで提示した命令文の分析は、ほぼそのまま英語の命令文に適用できる。

- (25) a. Open the door. Be quiet.
b. Behave **yourself**. Use **your own** pen. Get inside, will **you**?
c. **You** be quiet.
d. Somebody open the door, will **{you/*he}**?
(cf. Someone opens the door everyday, doesn't he?)
e. Everybody_i take off **{your_i hat/*his_i hat}**.
(cf. Everybody_i takes off **{*your_i hat/ his_i hat}**.
f. John come here, and Mary stay there!
g. Don't you say anything. Don't anyone open the door.
(cf. You don't say anything. *Anyone don't /doesn't open the door.)

(25a)のような文は、典型的な英語の命令文だが、日本語と同様に主語の省略が見られる。しかし、日本語と異なり、英語では、述語は特定の命令形態を持つわけではなく「不定詞」形が現れ、時制は明示されない。つまり、命令文全体は *irrealis* として規定される。また、省略された主語は、(25b)で観察される照応形が *you* を先行詞に取ること、(25c)のように *you* そのものが主語として表出することから、基本的には *you* である。しかし、日本語の(21)で観察されたと同じく、主語は語用的に「聞き手」であるなら、(25d, e, f)の *somebody*、*everybody*、*John*、*Mary* のような「語彙的3人称」も可能である。これらの3人称名詞が「語用的2人称」の「聞き手」であることは、文内の照応要素が *you* で受け、3人称の *his* では受けられないことから明らかである。さらに、否定命令文の(25g)には *don't* が用いられ、それは、主語位置 (IP 指定部) より前で、否定対極表現の *anyone* 主語をその作用域に取れることから、構造的に上位に生起する。つまり、*don't* の位置は日本語の命令否定辞「な」同様、Fin (もし

¹¹ 本論文ではテクニカルな詳細には立ち入らないが、一致 (Agree) 操作は局所性を満たす必要があり、素性 [+Ad] は最も近い位置の名詞句 (つまり、主語) との一致が必要である。また、Force は CP システムの最上位主要部であるが、phase (位相) 毎に Spell-Out (書き出し) 操作が適用されるとする phase を用いた枠組み (Chomsky(2001)) では、Spell-Out の対象となるのは、phase の補部であるから、主文の場合、phase 最上位の ForceP は、それを補部として選択する主要部が存在しないために、常に Spell-Out の対象とはならないと考えることができる。この考え方を踏襲すると、命令形や命令否定辞「な」は、(24)で示したように、常に Force 以下の位置 (例えば、Fin) に起こることになる。本論文では、命令文での主語は、上述したように、CP 内の人称素性 (例えば [+Ad]) と一致すれば、省略 (音韻の無声化) の対象となると考えるが、Haegeman (2007) は、主文において見られる1人称の主語省略現象 (以下の4.1節参照) は、ForceP の指定部に存在するために、Spell-Out が適用できず、「省略」として現象化するとの分析を提示している。(本報告書には、Haegeman (2007) のハンドアウト (日本語翻訳版) が収録されているので、参照されたい。)

くはそれより上位) であろう。こうした現象を考慮すれば、英語の命令文は、(24)の鏡像である(26)として分析できる。



ちなみに、日本語の分析(24)も英語の分析(26)も、各々の言語単独の考察だけでは、この分析に至ることは難しい。日本語だけなら、上述したように、主語の省略は「復元可能性」という談話的・語用的条件だけで、他の「主題省略」などの現象との区別がつきにくい。しかし、主語省略を一般に許さない英語で、命令文の主語が省略できることを同時に考慮するならば、命令文の主語省略は、命令文という文タイプに特有の現象として捉える必要が出てくるわけである。他方、英語の命令文だけを考察するならば、英語の述語は「不定詞」で、 ϕ 素性などの「一致」は形態的には観察されないように見えることから、主語省略と述語の形態を結びつけることは難しいであろう。しかし、日本語で命令文に特有の形態が明示されること、英語のような言語でも主語省略が観察されること、を総合すると、CP (Force) の命令 IMP が特定の Fin タイプ (irrealis) を指定し、それは言語により特定名形態となって現れる。さらに、IMP は、主語に人称素性 [+Ad] 要素との一致を要求し、それが満たされることを条件として、主語省略が可能となるのである。この命令文における主語省略の現象は、NSL の pro 生起条件も考慮するならば、主語省略に関し、(27)として一般化することができる。

(27) 空主語 (主語の省略、無声化) の認可条件

主語の省略は、機能範疇 (IP や CP) の主要部の人称素性の一致により可能となる。

この条件を、主語省略の重要な一般化として、3.3 節、4.1 節では、1 人称主語の省略現象を考察する。さらに、4.2、4.3 節では、PRO についても、(27)の観点から分析が可能であることを示し、主語省略には文の機能範疇 (特に、CP) との「一致・呼応」が条件であると主張する。

3.3 1 人称主語の省略：マシヨウ文

上記でも触れたが、日本語は、一般に会話状況から復元可能な定名詞は省略が可能と考えら

れており、以下のような現象が観察される。

- (28) a. {私は／彼は／誰かが／*誰かは／ ϕ } 本を読んだ。
b. {それは／それを／何かを／*何かは／ ϕ } 花子買った。

これらの文で ϕ は省略された要素を示すが、 ϕ の解釈には制限があり、「私は」「彼は」「それは」のようにハ格を持つ代名詞で表せる(主題化できる)要素を指すことはできるが、「誰か」「何か」のような不定名詞は指すことができない。そして、不定名詞はハ格を伴うことができないことから、日本語での省略は主題化されたハ格名詞を対象とすると広く考えられてきた(Kuno(1973)、久野(1978))。これをここでは「主題化省略の仮説」と呼ぶが、この仮説に従えば、「話し手」(私、僕など)や「聞き手」(あなた、君など)は、主題化の対象となりハ格を伴うことが多く、会話の場に存在するわけであるから、最も典型的な「省略の対象」と考えられてきた。そして、前節 3.2 でも触れたが、命令文の「聞き手」主語の省略も、日本語に関する限りは、この主題化プロセスによる省略と考えることも可能であった。しかし、3.2 節ではその分析は取らず、主題化省略が一般的には適用されない英語のような言語であっても、命令文の主語が省略されることから、また、(特に、日本語においては)命令文に特有な述語の形態(命令形や否定命令辞の「な」など)が観察されることから、命令文の「聞き手」主語省略は、主語省略の条件(27)により可能となる、主題化省略とは異なるプロセスとして分析したのである。

そして、この命令文と同様の分析が、(29)のマシヨウを伴う文(cf. 上田(2007)の(20c))にも適用できる。

- (29) a. {私／私たち／花子と私／*あなた／*花子} が 行きましよう。
b. ϕ 行きましよう。 ϕ = 私、私たち／*あなた、*3人称主語

注8で言及したが、マシヨウは「話し手の意志」「話し手の随伴者としての誘いかけ・勧誘」を表し、その主語は「話し手」または「話し手を含む」1人称、つまり、[+Sp]素性をもつ要素、である。そして、主語は、(29b)から分かるように、省略が可能である。そして、マシヨウと主語の人称は一致し、(27)の条件を満たすことから主語が省略できると考えられる。マシヨウ文は、平叙文とは異なり、話し手の意志を表し、時制も未実現の *irrealis* であることから、Force の一つのタイプ(便宜的に、意志、Volitional を略して VOL)と考えられ、命令文とは、Force のタイプと一致素性は異なるが、構造的には、(24)の命令文と同様の分析が可能な構文である。つまり、マシヨウ文の Force 素性は VOL であり、それは「話し手」(Speaker を表す [+Sp])素性を持ち、文内のその素性を持つ要素(主語)との「一致」を必要とする。一致した要素は(27)により省略が可能となるのである。

本節では、主文の CP の Force に現れる語用的機能に注目し、3.1 節で疑問詞疑問文を、3.2 では命令文、3.3 ではマシヨウ文を考察した。これらの構文では、(i) 共に各々の Force と連動して文内要素と「一致」を引き起こす素性（疑問文では疑問素性、命令文では [+Ad] 要素、マシヨウ文では [+Sp]）を持ち、(ii) Force は、それと関わる CP の主要部の形態を規定し、疑問文では終助詞の「か」を（英語の疑問文と同様に考えるなら）おそらく Focus 主要部に、命令文・マシヨウ文では Fin に irrealis を指定し、それはおのおの述語の命令形や否定命令辞「な」、マシヨウとして具現されるために、命令文・マシヨウ文では「主語と述語の人称の一致」が確認される。さらに、(iii) 主語との一致を示す述語は CP (Force、Fin) により認可されていることから、(27)を満たし、主語省略現象を示すことができるのである。すなわち、主語の省略は、CP 素性との一致により可能となるのである。次節では、明確な述語形態との一致が見られないにもかかわらず、主語省略が観察される現象（1 人称の主語省略、および PRO）を扱い、これらも(27)の条件に従う構文であり、その省略に CP が関わっていると論じる。

4. 主語省略現象：CP 素性との一致

第3節では、CPのForce素性の観点から、述語の形態に注目し、それと一致する主語が省略できることを観察し、ロマンス語などのpro主語にも対応可能な、(27)の一般化を得た。本節では、この主語省略にかかわる一般化(27)を、重要な一般化と位置づけ、それを「逆手」に取る形になるが、表面的には「CP要素なり述語なりとの一致」が見られなくとも、主語の省略が観察されるなら、そこにはCP素性との一致があると仮定することで、捉えられる現象を2つ考察する。一つは、主文の1人称主語の省略現象であり、もう一つはPRO主語である。¹²

4.1 1 人称主語の省略

4.1.1 日本語の主文の1人称主語

上記 3.3 で、(28)を例に取り、「主題省略の仮説」に触れ、日本語はハ格を伴って主題化された要素は省略の対象になることを見た。主題化されうるのは、会話状況において「話し手」と「聞き手」にとって「既知情報」「旧情報」となる要素であるとの一般化が広く受け入れられている。その意味では、1 人称の「私」は「話し手」を指すことから、旧情報と考えられ、(30)に見られる1 人称の省略は「主題省略の仮説」に従った結果と考えるのは自然である。

¹² ちなみに、英語の命令文はこのケースに該当する。3.2 で見たように、英語の命令形は不定詞形であり主語 [+Ad] との明確な一致は観察できない。しかし、「命令」という特定の Force が想定でき、また、日本語では明確な述語命令形を提示することから、主語と CP (Force、Fin) は「一致」操作が関わっていると分析できたのである。

- (30) a. {私は／ ϕ } 昨日 太郎を夕食に招待した。
 b. {私は／ ϕ } 新しい車を買います。

しかし、「私」が常に「主題」となれるとすると、(31)の現象の説明はできない。

- (31) a. {太郎は／*私は／ ϕ 花子／* ϕ 私} 花子が e 招待した。
 b. {花子は／*私は／ ϕ 花子／* ϕ 私} 太郎が [e パーティに来た] と言った。
 c. {花子は／*私は／ ϕ 花子／* ϕ 私} 太郎が [君が e 招待した] と思っている。

詳しくは、長谷川(2007b)で論じたので、ここでは簡単に述べるに止めるが、(31)でハ格主題化および省略の対象となっているのは、(30)(および(28))では主文の主語であったのに対し、(31a)では目的語であり、(31b)は従属節の主語、(31c)は従属節の目的語である。¹³ そして、興味深いことに、それらは、主文の主語の場合と異なり、1人称では、主題化もできず、また、省略も叶わない。3人称の「花子」や「太郎」は、ハ格を伴い主題化でき、また省略(ϕ)も可能なことから「主題省略の仮説」に従うと分析できる。しかし、1人称の省略も「主題省略の仮説」によるとすると、(31)の「主文の主語ではない」環境では、主題化、省略できないという事実の説明がつかない。

こうした現象から、長谷川(2007b)では、「主題化」は一般的に「非1人称」(つまり [-Sp])に限られ、1人称が省略できない(31)の現象はこの条件を満たさないからであるとし、(30)で観察される1人称のハ格、および省略については、主題化とは異なる「主文の主語のみ」に適用される別のプロセスによると論じた。この1人称主語のハ格と省略の特徴は、「主文」に限られ「主語」でなくてはならない点、つまり、3.2と3.3で観察した命令文とマシヨウ文と全く同じ環境で起こるといふ点、である。異なるのは、1人称主語省略では、命令文やマシヨウ文のような特徴的な述語の形態や時制が観察できない点であり、明確に「主語と文末が呼応」しているわけではない点である。しかし、Ross (1970)の Performative 分析にも通じるが、発話(特に、「断定文」)には常に話者の事態への観点が表出されていると考え、それが Force の素性として(マシヨウ文と同様) [+Sp] 素性を持つとするなら、断定文における [+SP] 素性の存在は想定できると思われる。すでに、3.2節の英語の命令文で、述語が主語の [+Ad] 素性との一致を示す特別な形態を持たずとも、命令文一般がその素性を持ち、主

¹³ 1人称の目的語をハ格表示、省略するためには、述語にクレルのような「話者の共感」(久野1976)と関わる要素が必要である。クレルを用いれば、(31a)は(i)となり、「私」でもハ格、および省略が可能である。

(i) {私は／ ϕ 私} 花子が招待してクレタ。

長谷川(2007b)では、1人称主語の省略だけでなく、(i)のようなクレルによる1人称の省略についても詳しく考察している。

語との一致を保証するとの分析を提示したが、上記の主文の1人称主語の省略においても、主文の Force が [+Sp] 素性を保持しており、それが1人称主語と一致し(27)を満たすことから、主語省略が可能と考えることができる。そして、ハ格は、まさにその「一致」の証と考えられよう。

第2節の(17)で、Force 機能は主要部もしくは指定部に表示されなくてはならないとの条件を提示したが、命令形、マジョウ文の場合は、明らかに主要部でそれを明示している。それに対し、1人称主語の省略の場合、述語が特定の形態を示さない。それは、CP 主要部での表示はなされていないことを意味し、「表示」は指定部要素に観察されることが予想される。まさに、ハ格がその役割を果たしていると考えられよう。1人称のハ格主語の位置については、以下の4.1.3で考察するが、その前に、英語の日記文でも(30)(31)で観察されたのと同様の1人称省略現象があることを見ておきたい。

4.1.2 英語の主語省略

日本語では、上述したように1人称主語の省略は一見、他の人称の「主題化」要素の省略と区別しにくい。しかし、英語のような言語の現象も平行して考察すると、主文の1人称が特別であることが分かる。(32)を観察してみよう。

- (32) a. Saw no one.
b. Hurt myself when trying to cut roses.
c. Left the party exhausted. (Haegeman 1990: 161)
d. (I) wonder when *(I) will see her again. (Haegeman 1990: 163)
e. John did not meet *(me).

こうした主語省略の文は、英語では、日記やインフォーマルな手紙やメモといった特別な register (言語形態)に限られる substandard (非標準)な現象であるが、広く観察され、Haegeman (1990, 2007)も規則的な文法現象であるとしている。本報告書に掲載してある Haegeman (2007)での発表(ハンドアウト)では、省略(無声化)された主語は、1人称に限ったことではないとしているが、(32)で省略されているのは(32b)の照応詞 myself からも明らかのように1人称である。そして、(32b)や(32c)で when を用いた分詞構文や exhausted のような2次述語の存在は主文の主語により認可・解釈されることから、これらの主文には統語的な主語が存在していることが分かる。更に、日本語の(31)の現象と同じく、この省略は、目的語や補文の主語では許されず、主文の主語に限られるのである。

英語においても、この省略と明確に対応する述語形態(主要部)が観察されるわけではない。しかし、日本語と異なり、英語では主題省略が一般的に許されないのであるから、主文の主語を省略すること自体が、CP 機能を指定部で表示していることを意味していると考えることが可能と思われる。つまり、こうした主語省略文は主文の Force に [+Sp] 素性を持ち、

それとの一致を示す1人称主語が省略の対象となる。

4.1.3 主文1人称の位置：主題との比較

日本語では、1人称主語も他の主題化要素もハ格を伴うが、4.1.1では、(31)の現象を基盤に、1人称のハ格と主題のハ格は異なるハ格として扱った。そして実際、その2つは構造的位置も異なることを示す証拠がある。Kuno (1973)は文に許される「主題」は、1つのみで、複数のハ格が生じた場合は、最初のハ格のみが「主題」であり、それ以外は「対比」を示すハ格であると述べている。その裏付けとなるのは(33)でみられるような現象である。

- (33) a. 太郎は その本は 読んだ。 (太郎は=主題；その本は=対比)
b. その本は 太郎は 読んだ。 (その本は=主題；太郎は=対比)

この一般化だけでなく「主題省略の仮説」も正しいとすると、一つの文で2つの要素が主題化されることも、省略されることもないことを予測する。そして、(34)から分かるように、その予測は正しい。

- (34) a. A: 「太郎はどこ？」 B: 「{φ/太郎は/*太郎が} 庭にいるよ。」
b. A: 「新聞はどこ？」 B: 「{φ/新聞は} 今太郎が読んでいるよ。」
c. A: 「太郎は？ 新聞は？」 B: (i) *「今、φ φ 読んでもよ。」
(ii) *「今、太郎は、新聞は 読んでもよ。」

(34a)と(34b)では、質問により「主題」を設定し、答えではその主題がハ格で表されるか、もしくは省略できることを示している。そして、(34c)だが、質問で2つの要素を「既知要素」として提示した場合、それらに対応する形で両方をハ格で受けることはできないし、省略することもできない。しかし、「私」が主語と解釈されるなら、(35)で見られるように、主語と目的語の両方ともを省略することが可能である。主語と目的語の両方を主題として、その2つを省略することは、(34c-i)の非文法性が示すように、許されない。しかし、主語が「私」なら、主題化された目的語も、「私」も同時に省略できるのである。この(34c-i)と(35)の文法性の対比から、4.1.1で論じたように「私」は主題ではない、ということになる。

- (35) A: 「新聞は？」 B: 「今 φ φ 読んでもよ。」

上記と同様のポイントだが、目的語を主題化し、主語が省略されている(36)のような文の解釈も、「私」が主題とは別物であることを示している。

- (36) 「新聞は、φ 読んでもよ。」

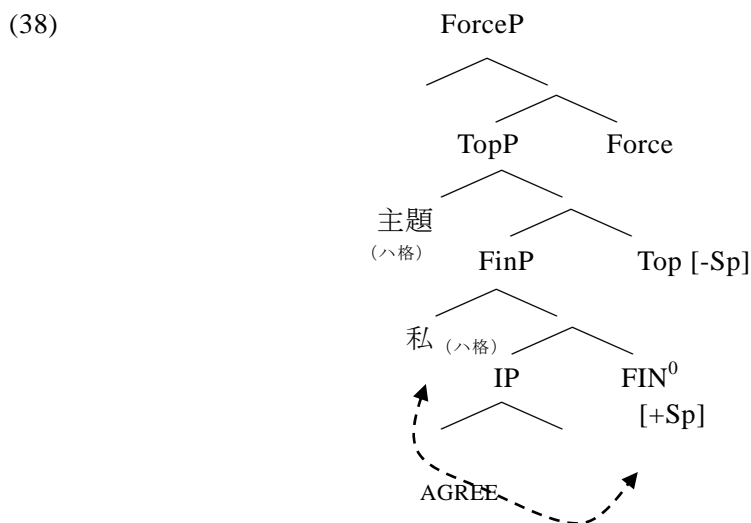
- (i) 新聞=主題、主語=私
- (ii) *新聞=主題、主語=3人称主題
- (iii) 新聞=対比、主語=3人称主題/私

ここでは、目的語にハ格が用いられているが、この「新聞は」の解釈は、主題と対比の2つの可能性がある。対比の場合(iii)は、省略された主語は3人称でも「私」でもどちらも可能だが、「新聞は」を主題と考えた場合の(i)(ii)では、(ii)の非文法性が示すように、主語は「主題」である可能性はなく、(i)の「私」としか解釈できないのである。

このように、「主題」と「私」は共起できる。つまり、「私」のハ格は主題のハ格ではない。そして、この2つの要素の順番は、(37)から分かるように、「主題」が先で「私」が後続するのである。

- (37) a. その本は 私は 読んだよ。
- b. 私は その本は 読んだよ。

(37a)では、「その本は」を主題とした場合、「私は」は対比でなくともよい。それに対し、(37b)のように「私は」が文頭にある場合は、「その本は」は主題とはなれず、対比である。このことから、(2)のようなCP構造を想定すると、「私は」は主題 (TopP) の下の FinP の指定部に生起すると考えられる。そして、その移動が主要部の [+Sp] により駆動されるとするなら、その素性は、命令文やマシヨウ文同様 Force で認可されたとしても、最終的には Fin 主要部に存在し、その指定部に1人称主語を移動させ、ハ格を付与させる。その「一致」を受け(27)の省略の条件が満たされ、主語が省略(無声化)されるのである。これを(38)に示す。



4.2 PRO 主語について

省略（無声化）された主語の最も典型的で、どの言語にも観察されると思われるのは、PRO 主語である。(39)は英語であるが、PRO の典型的な例である。

- (39) a. Mary_i tried [PRO_i to fix the car].
b. John told Mary_i [PRO_i to fix the car].
c. [PRO_{arb} to win] is a lot of fun.

GB 理論では、こうした PRO は、不定詞や動名詞といった時制を伴わない文の主語位置に生起することから、時制文の主語に起こる語彙主語とは異なる扱いを受け、「統率されることを許さない」よって格を付与されることのない特別な存在として位置付けられてきた。90年代には、PRO の「特別視」は多少「緩和」され、語彙主語同様格付与の対象になるとしたが、音声がないことから、付与されるのは Null Case（無格）であり、それを付与できるのは時制を持たない Infl によるとの分析が提示された。何れにしても、PRO には語彙主語とは異なる特別な認可が想定されてきた。そして、その解釈においては、PRO にのみ適用されるコントロール理論を想定し、(39a)(39b)のように PRO を C 統御する主文の要素 (Mary) があれば、それに依存し（コントロールされ）、そのような要素がない(39c)では、随意的 (arbitrary) 解釈を保証してきた。

しかし、主語の省略を CP 主要部との一致との関わりで扱う本論文で提示してきた分析を想定すると、PRO 自体も、省略（無声化）された主語として、(27)の条件を満たしている要素として分析する可能性が考えられる。本節では、この可能性を、Borer (1989)の PRO 分析を援用して追求してみたい。

GB理論下でも、上述したようなPROの特殊性については認識されており、PROの認可や解釈を他の一般的な原則から導き出す試みが何度となく追求されてきた。¹⁴ そうした試みのうち、Borer (1989)のPRO分析は、上記で示した空主語現象の分析と通じる部分があり興味深い。

Borer は、PRO の解釈が上位文に依存している（局所性を持つ）という事実の説明を、PRO にのみ特有のコントロール理論に求めるのではなく、局所性とその基本的である照応詞の性質に求め、その anaphoric な性質を PRO に持たせるのではなく、Infl (Agr) 自身のものとした。つまり、Infl は（時制依存も含め）上位文の要素と照応する性質を持ち、Infl と PRO が一致することから PRO の解釈を導き出す提案をしている。具体的には、(39a)を(40)のような構造として分析し、PRO を司る Infl が CP（主要部）に移動し、そこで Infl が主文の先行詞 (Mary) に束縛されることで、結果として PRO を認可・解釈するとの分析である。

- (40) Mary_i tried [_{CP} Infl_i [_{IP} PRO_i [_{Infl} e_i] to fix the car].

¹⁴ 例えば、Huang (1984)、Manzini (1983)、Borer (1989)など。Borer (1989)については以下で言及するが、Jeagly and Safir (1989)も Borer と通じる考え方を提示している。

PRO の認可・解釈に Infl が関わるだけでなく、Infl が CP へ移動していると考えられる理由は、CP の主要部に for が生起し、そのために Infl が C に移動できない(36)のような場合は、PRO が生起できないからである。

(41) *It is easy [CP for [IP PRO [infl] to fix the car]].

つまり、PRO には CP (主要部に移動した Infl) からの認可が不可欠なのであり、(40)の PRO の分析は、本論文の空主語に対する上記の提案と基本的には同様の構造と条件によるものである。このことは、GB 理論で PRO は特殊な要素と扱われてきたが、上記で扱ってきた、主文の空主語現象の観点から考えるなら、PRO が CP に移動した Infl により認可・解釈されるということは、(27)の空主語の生起条件に従っていることになり、PRO は空主語の一つのタイプに過ぎないと分析できるのである。

言い換えれば、PRO は IP 内部での現象を中心的に扱ってきたこれまでの空範疇分析では、特殊な存在であったかもしれないが、IP より上位の CP 構造の観点から考察し直すなら、空主語現象の一つとして、上記で扱ってきた命令文主語や 1 人称主語の省略現象と同様に扱うことができる。つまり、PRO が生起する節の CP の機能と構造を、他の空主語を認可する CP の機能と構造と比較して考察するなら、PRO が CP 要素と「一致」していると考えることが自然である。英語の命令文では、述語形態は不定詞で主語との (いわゆる ϕ 素性の観点からの) 一致は観察されない。しかし、この (i) CP が命令文 (Force が IMP) であること、(ii) 述語が不定詞であり、時制 (Fin) が未実現 (irrealis) であること、(iii) 主語が [+Ad] 素性と一致する要素であり、空主語になれること、この 3 点全てを総合的に考えれば、主語が CP (Force-Fin) と「一致」し、「一致」の結果、空主語が可能となるとの分析に辿りついたのである。4.1 節の主文の 1 人称主語省略現象も同様に考えることが可能であった。そして、PRO についても、(i) CP (Force) が従属節であること、(ii) 述語が不定詞・動名詞であり、時制 (Fin) が主文の時制に依存すること、(iii) (Borer によれば) 主語が上位文の先行詞 (もしくは随意的解釈) として、CP 内 Infl と「一致」する要素であり、空主語であること、この 3 点が総合して観察される現象であり、これらはまさに、空主語を認可する基本的には同じプロセスであろう。違いは、CP の Force の素性に帰することができると思われる。命令文や 1 人称空主語のケースは Force 自体が人称素性をそれぞれ [+Ad] [+Sp] として規定していた。しかし、PRO の場合の人称素性 (ϕ 素性) は、上位文との関係で決定される。しかし、これは、従属節としての (上位文に依存するという) CP の機能から派生されることであって、空主語認可にかかわるメカニズムの違いに因るのではないであろう。PRO との一致を促す Force の人称素性自体が上位文との関係で決定されるが故に、PRO の解釈が変わるに過ぎないのである。

この考え方が正しいことを示す興味深い例が、(37)のような文である。

(42) Mary knows [how [PRO_{arb} to fix the car]].

この文の PRO は、C 統御している主文の要素 (Mary) が存在するにもかかわらず随意的な解釈が可能であり、(39)で観察された典型的な PRO の解釈からは例外となる。さらに、補文の CP には how が介在していることから、Borer の(40)の分析を字面通りに採用するなら、Infl が CP に移動できず、(41)同様、非文となることが予想されよう。しかし、(42)が(41)と異なるのは、CP 要素が(41)は for (主要部 C に生起する要素) であるのに対し、(42)では疑問詞の how であり、それは CP 内の指定部 ((2)の CP 構造との関係では FocusP の指定部) に移動する要素である。つまり、(41)は、Borer の分析通り、Infl が C (Fin) に移動できないことから、非文となるが、(42)は、Infl は C (Fin) に移動できるので非文とはならない。そして、PRO が随意的に解釈できるのは、まさに CP (FocusP) 指定部に疑問詞が存在するために、上位文からの ϕ 素性コントロールが阻止されると考えられる。つまり、(42)は(43)のように分析できるのである。

(43) Mary knows [CP [how [_{Fin} Infl_i [_{IP} PRO_{arb} [_{Infl} e_i] to fix the car]]]].



本稿では、いかに CP 指定部要素が、Mary からの ϕ 素性コントロールを阻止するかに関わる実際のメカニズムを提示することはできないが、それは、今後の課題として「一致」のメカニズム全体を統一的に考えることで明らかにされるものと確信している。

4.3 日本語の主文の PRO_{arb}

上記の英語の PRO の解釈において、(42)で CP 内の指定部に疑問詞が起こることで随意的な PRO が生起できることを見た。日本語でも、それに似た非常に興味深い現象がある。

- (44) a. ϕ 駅で新聞を売っている。 ($\phi \neq arb$)
 b. ϕ この町で水曜日にゴミを集めます。 ($\phi \neq arb$)
- (45) a. 駅では ϕ 新聞を売っている。 ($\phi = arb$)
 b. この町では ϕ 水曜日にゴミを集めます。 ($\phi = arb$)

この現象については、長谷川(1995)で指摘したのだが、ハ格要素の有無により、空主語 ϕ (および時制) の解釈が異なるのである。空主語 ϕ は、(44)では、随意的ではなく、会話状況から復元可能な定名詞を指し、これは、3.3でも触れた「主題省略」によるものと考えられる。時制も、現実の時間軸と関わり(44a)では現在、(44b)では近未来、もしくは(定名詞主語の)現在の習慣を表す。それに対し、(45)では、空主語 ϕ は随意的と解釈でき、時制も現在の習

慣の可能性もあるが、「そういうものである」という未実現 (irrealis) もしくは全称時制 (universal tense) の解釈が強い。これだけの解釈の違いをもたらしているのは、付加詞の「～デ句」が主題化されているか否かだけである。つまり、付加詞が主題化されることで、(44)で可能だった主語の主題化の可能性が排除され、(45)の主語は主語位置で空主語となる。空主語は(27)の条件に基づき、CP 主要部との「一致」がなされている筈で、その一致において、主題化要素が TopP 指定部に存在していると、(42)で疑問詞の how が上位文からの PRO 解釈を阻止したと同様に、特定人称が阻止され、随意的解釈となる。詳細は今後の課題としたいが、Borer の分析で捉えようとした、PRO 解釈と時制解釈の結びつきが、(45)においても観察できることから、(45)の現象は PRO 現象の一部であり、その随意的解釈が irrealis なり universal tense なりによりもたらされるという事実は、主語 (PRO) と Infl (むしろ CP システムの Fin) との間の「一致」として捉えることの適切さを示していると思われる。

5. まとめ

本稿では、命令文やマシヨウ文、1 人称主語省略現象、PRO といった、これまで「構文別」に記述されてきた空主語現象を各々の構文とは切り離して「CP 要素との一致による空主語」として統一的に分析することを提案した。生成文法理論の発展の軌跡に、言語現象を構文ごとに記述するのではなく、移動や束縛関係など、言語全般に許されるメカニズムの観点から現象全体を俯瞰し記述・説明する方向性が理論体系を整備することで、これまで得ることのできなかつた根源的な一般化を獲得することが可能となってきたことがあげられる。それにより、言語現象が個別言語の境界や構文ごとの特殊性から解放され、ヒトの認知システムの一環として言語現象を考察することができるようになったわけである。本研究の方向性も、この流れに沿ったものである。音形を持たない主語 (空主語) の存在は、これまで主に、言語別、構文別に考察されてきた。命令文の you (2 人称要素) 省略による空主語、日本語の主題省略によるゼロ代名詞、不定詞文の PRO 主語、など、といった具合である。構文や個別言語に見られる違いから考察するなら、これらの空主語に共通点を探すのは難しい。しかし、そもそも空主語は「音形がないが名詞句としての統語的カテゴリーを持つ」という、直感的には「同じ性質」を持つ要素である。「移動」に関し、「受動文」とか、「主語上昇文」などに分けて考えていた時には見えてこなかった「名詞句の他の名詞句位置への移動」として、直感的、統一的、俯瞰的に見ることで、「移動の本質」が明らかとなったという理論的発展状況に似て、「空主語」が生起するという共通性を直感的、統一的、俯瞰的に見ることで、空主語の本質が見えて来たように思う。つまり、空主語はそれのみでは生起しない。必ず、文のタイプや述語と関わる要素との関係で、生起するのである。つまり、(27)の一般化である。

この方向性は、言語習得の観点からも望ましいものであろう。子どもは、主語が空である

- (47) a. … dase *pro* komt dase: [-pl][3rd person, F]
 ‘that she comes’
- b. *… da *pro* komt da: [-pl] (人称素性なし)
 ‘that he/she comes’
- c. *… dan *pro* Kommen dan: [+pl] (人称素性なし)
 ‘that they come’

興味深いのは、West Flemish が時制節に空主語を許し、述語の形態も主語との「一致」を示しているにもかかわらず、空主語を認可するためには、述語との「一致」だけでは不十分で CP が必要で、かつ「人称素性」が欠かせないという事実である。West Flemish の補文標示には補文標示としての *that* のような機能だけでなく、Fin に現れる人称素性も含んでいると考えれば、空主語 *pro* の認可も、CP の Fin 素性との「一致」により可能ということになり、それは、本稿で、命令文、PRO 主語などで繰り返し主張してきた空主語の認可条件と同じとなる。スペイン語はじめ、他の空主語言語の CP に人称を示さない空主語については更なる考察が必要だが、今後の検証の対象となる「作業仮説」としては、(27)を改訂し、より「強力な」(48)を提示したい。

(48) 空主語（主語の省略、無声化）の認可条件

空主語は、CP の主要部素性（おそらく「人称素性」）との「一致」により可能となる。

上記では、CP の一致素性（人称）は文タイプ（Force）と連動していると思われることから、「一致」は Force の主要部にあると仮定した。しかし、Rizzi (1997)によれば(1)に引用したように、CP システム内の Force は Fin を規定するわけであるから、主語との「一致」は Fin によりなされると考えることも可能であろう。CP システムそのものの構造も、(2)のように複数主要部構造なのか、1つの主要部に許される階層的素性なのか、といった基本的なことも含め、今後の課題としたい。第1節で述べたように、これまでの文構造と現象は命題範疇（IP レベル）で捉えることに重きが置かれ、それより上位の CP 構造とレベルについては、最低限のものしか想定してきていない。そして、当然のことながら、命題レベルを越えた現象の記述・説明も大枠でしかなされてきてはいない。しかし、本論文で扱った現象も含め、命題レベルでは収まらない現象を、その機能と構造、派生を、CP 機能と構造に照らして考えるという作業は緒についたばかりである。これまで IP レベルからしか見ることのできなかった現象を CP レベルから見ること、これまでとは違った一般化や説明が可能となる可能性は大いにある。本稿の主張(48)は、まさに、そうした研究での作業仮説として、十分意味あるものであると信じたい。

参照文献

- Borer, H. 1989. Anaphoric AGR. In O. Jaeggli and K. Safir (eds.) *The Null Subject Parameter*. 69-109. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Cheng, L. 1991. *On the Typology of Wh-Questions*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Chomsky, N. 2001. Derivation by Phase. in Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*. 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Cinque, G. 1999. *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford University Press.
- Emonds, J. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. N.Y.: Academic Press.
- Endo, Y. 2007. *Locality and Information Structure: A Cartographic Approach to Japanese*. John Benjamins.
- Haegeman, L. 1990. Understood Subjects in English Diaries. *Mitilngua* 9, 157-199.
- Haegeman, L. 2007. Subject Omission in the Present-day Written English. 神田外語大学 CLS 理論言語学ワークショップ (2007年10月20日、於：東京国際フォーラム B5) にて口頭発表。(本報告書に、この発表のハンドアウト原稿(和訳版)が収録してある。)
- Hasegawa, N. 1984/85. On the so-called Zero-Pronouns in Japanese. *The Linguistic Review* 4: 289-342.
- Hasegawa, N. 1991. Affirmative Polarity Items and Negation in Japanese, in C. Georgopoulos and R. Ishihara (eds.) *Interdisciplinary Approaches to Language*, 271-85. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Hasegawa, N. 1994. Economy of Derivation and A'-Movement in Japanese. in Masaru Nakamura (ed.) *Current Topics in English and Japanese*. 1-25. Tokyo: Hituzi Publishers.
- 長谷川信子. 1995. 「省略された代名詞の解釈」『日本語学』14: 27-34.
- Hasegawa, N. 2005a. Honorifics. In M. Everaert and H. Van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell Companion to Syntax, Vol 2*. 493-543. Malden, Mass.: Blackwell Publishers.
- Hasegawa, N. 2005b. EPP Materialized First, Agree Later: Wh-questions, Subjects and *MO* -phrases, *Scientific Approaches to Language*, No.4, pp. 33-80. 神田外語大学, 言語科学研究センター.
- 長谷川信子. 2006. Sluicing and Truncated Wh-Questions 『言語科学の神髄を求めて』鈴木右文・水野佳三・高見健一(編) pp. 453-470. ひつじ書房.
- 長谷川信子. 2007a. 「日英語の Sluicing 構文と短縮疑問詞疑問文」*JELS* 24: 61-70. 日本英語学会.
- 長谷川信子. 2007b. 「1人称の省略：モダリティとクレル」長谷川信子(編)『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』331-369. ひつじ書房.

- 長谷川信子. 2008 「提示文としての中立叙述文」『言語研究の現在：形式と意味のインターフェース』金子義明・菊地朗・高橋大厚・島越郎（編）, 62-80, 開拓社.
- Hasegawa, N. 2008. Licensing a Null Subject at CP: Imperatives, the 1st Person, and PRO, *Scientific Approaches to Language*, No.7, pp. 1-34. 神田外語大学, 言語科学研究センター.
- Huang, C.-T. J. 1984. On the Distribution and Reference of Empty Pronouns. *Linguistic Inquiry* 15: 531-74.
- 井上和子. 1976. 『変形文法と日本語 上・統語構造を中心に』大修館書店.
- 井上和子. 2007. 「日本語のモーダルの特徴再考」長谷川信子（編）『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』227-260. ひつじ書房.
- Jaeggli, O. and K. Safir. 1989. The Null Subject Parameter and Parametric Theory. In O. Jaeggli and K. Safir (eds.) *The Null Subject Parameter*. 1-44. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Kuno, S. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』大修館書店.
- Kuno, S. and E. Kaburaki. 1977. Empathy and Syntax. *Linguistic Inquiry* 8: 627-72.
- Kuroda, S.-Y. 1988. Whether We agree or Not: A comparative Syntax of English and Japanese. In W. Poser (ed.) *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, 104-143. CSLI.
- Manzini, R. 1983. On Control and Control Theory. *Linguistic Inquiry* 14: 421-446.
- 益岡隆志. 1991. 『モダリティの文法』くろしお出版.
- 益岡隆志. 2007. 『日本語モダリティ研究』くろしお出版.
- 南不二男. 1974. 『現代日本語の構造』大修館書店.
- 仁田義雄. 1991. 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 野田尚史. 1995. 「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主題と取り立て』1-35. くろしお出版.
- Portner, P. 2004. The Semantics of Imperatives within a Theory of Clause Types. ms. Georgetown University.
- Portner, P. and R. Zanuttini. 2003. Decomposing Imperatives. ms. Georgetown University.
- Radford, A. 2004. *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Rizzi, L. 1997. The Fine Structure of the Left Periphery. In L. Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*. 281-331. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Ross, J. 1970. On Declarative Sentences. In R. Jacobs and P. Rosenbaum (eds) *Readings in English Transformational Grammar*. 222-272. Waltham, Mass.: Ginn and Company.
- 佐野まさき. 2006. 「とりたて詞をめぐる認可条件とカラ節」*Scientific Approaches to Language* 5: 49-69. 神田外語大学言語科学研究センター.

- 佐野まさき. 2007. 「とりたて詞の認可と最小性条件」長谷川信子（編）『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』73-111. ひつじ書房.
- 田窪行則. 1987. 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6:37-48.
- 上田由紀子. 2007. 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」長谷川信子（編）『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』261-294. ひつじ書房.